

正木さんの教え

2023\_11\_24, 25

熊本県正木さんのご自宅にて

1 元論、2 元論、多元論

非二元論（不二の理論）

（図 1 参照）

（尾田加筆）1 元論、2 元論、多元論では世界が 1、2 ないしは多数の（相互に可換でない構成要素＝元）から構成されていると考える。1 元論である唯物論では意識は全て物質の集合である神経細胞間の相互作用であり、全ての意識が必ず物質的な基盤を有する。2 元論では物質と意識を別の実在とし、世界が物質世界と精神世界の 2 要素より構成され、世界のどの要素も物質か精神活動のいずれかに属する。

一方、非二元論も物質と意識が相交わらない 2 つの実在とは考えず、より高度な一つの実在の 2 面性と考え。二元論のように物質と意識を分けられた実在とは考えない点で決定的に異なるので、非二元論と呼ぶ。意識だけが実在する（物質は意識が作り出す幻影であり実在しない）と考える 1 元論（＝唯心論）とも異なる。

意識 識＝色＝ cit

空＝色＝自分

色即是空 空即是色

世界（食べ物、水、空気）が「自分」という器を通して「自分」という現象が生起している。

「自分」とは器、演算子である。

（図 2, 3, 6, 7, 8 参照）

（尾田加筆）自分は器であり、実体のない空である。光の海（brahman, Cit）の一部が atman (cit)として自分という器（ahamkara）を通り、buddhi となる。物質世界において身体を御するために buddhi が脳を照らして脳を動かした結果の脳の動きが manas である。

身体というハードを御するためのソフトウェアが manas であり、身体を維持管理するために manas は buddhi の指令がなくても自律して身体を活動させることができる（本能活動）。そのため、manas はエゴ担当であり、損得を価値基準とする。

自分の身体はあくまでも自分の身体であり、身体は自分ではない。

宇宙には光が充満している。

しかし、その光を「ワタシ」は見えていない。

（尾田加筆）ワタシが見るのは、空間に充満する光ではなく、何かに当たって反射した結果、ワタシのレンズを通過して目に入射する光であり、ワタシが見ているのは、光そのものではなく、光が当たった「何か」である。網膜（の視細胞）は光そのものを受容しているが、ワタシ達の眼（視覚野における情報

処理システムも含めて)は、光そのものを見るためではなく、「何か」を見るために進化した。なので、視細胞は光を感じているが、ワタシ (manas も buddhi も) 光は見えていない。

奥にいる「ワタシ」は cit

cit は Cit から生まれる。

(図 4,5,6,7 参照)

(尾田加筆) 光の海が Cit であり、その一部 (cit) が atman として自分という器 (ahamkara) を通って buddhi となり、日々の暮らしを manas に任せて生きている。

インド哲学 manas, buddhi, ahamkara

インド	manas	buddhi	ahamkara, atman	cit, Cit
英語圏	mind		Heart, soul, Self	God
日本	心	心	心、真我=空	仏

(図 3,6,7 参照)

manas はエゴ担当 生存=維持担当なので、損得を考える

heart は中心にいる。

光 (Cit の一部である cit) は脳天から体内に入り、中心である heart に至り、さらに松果体に至って buddhi となって、脳を照らし、照らされた脳において manas が生まれる。

(尾田加筆) buddhi はなぜ居るのか?なぜ要るのか?

(正木さん回答 2023\_12\_07) Buddhi がなかったら、manas と atman だけだったら、無知か A 級ブツダか、という可能性しかありません。彼岸へ至る以外に救われようがありません。buddhi はその間に、manas の近くにあり、buddhi が目覚めることによって、樹木の眼で果実 (自分) を観て、その振る舞いを正すことができます。苦しみを避けることができますようになります。

それは、究極の悟りではなく、実存に近い人格的成熟です。buddhi の目覚めによって、無用の苦しみを我々は避けることができます。その知恵が倫理であり、道徳です。その根拠は果実が「樹木」を知ることにあります。

その知識は、果実の樹木破壊を止める、根拠になるでしょう。侵略をしない根拠になるでしょう。和解の根拠でもあります。別れていないことが。

現代文明は駆動力を強化しました。しかし制御装置は置き去りにされました。尺取り虫の後ろ足のよう。馬車を制御するのは、手綱と鞭ではなく、御者です。主人でもありません。御者の目覚めが、文明の次元上昇の鍵であるとぼくは思います。

(尾田返事 2023\_12\_08) manas は身体を動かすためのソフトウェアであって、意識では

なくむしろ身体の方に付随する活動 (機能) なのだと理解しました。本来は buddhi が身体を使うためのインターフェースとして manas は実装されているものであって、しかも「最低限の必要」のために

buddhi から自律して身体を動かすことができるんですね。buddhi が覚醒しない間は manas の価値基準で manas が身体を自動運転しているのです。buddhi が目覚めない (buddhi を認めない) 限り、manas = ジブンであり、光の海との繋がりを想定することができないので n 元論で堂々巡りしてしまうと理解しました。そうならないためには我々が日常において感じている「意識」にある階層性を正しく理解する必要があります。ジブンが身体を運用する上での手段としての意識活動 (manas) と、身体を運用する「主体」である自分 (buddhi) という意識活動とに、私たちの「精神活動」は大きく分かれます。両方とも脳の神経活動の集合であるはずと考えると、両方とも自分であって区別できないので自分=manas と考えるしかないことになるんですね。

ガブリエルもチャーマーズもこの誤りに陥っているように思います。

正木さんが11月1日のメールで「その電気を「意識」と考えてみてください」と仰った理由がわかりました。電気に意味が2種類あるように、意識・精神活動にも2種類あるんですね。この点は最初は理解が難しいと思います。

(参照：マルクス・ガブリエル 危機の時代を語る (NHK 出版新書))

中心 heart にはエゴがない。

松果体に至った光 (buddhi) は未だ純粋な光であって「自我」を持たない

損得を考えるのは manas 、

感じるのは頭 (manas) ではなく、胸 (heart)

(図6,7 参照)

地球の表面に存在している生命に関する全ての関係 (=生態系) を「地球マユ」と正木さんは呼んでいる。

「生命の樹木」と呼んでもよい。一人一人の「ジブン」は生命の樹に生った果実に相当  
樹に生った果実はそれ一つ一つが個人である「ジブン」であって、同時に全体が一本の木であるので、ジブンの隣に生っている果実は他人であって、他人でない。

(図4,7 参照)

生命の樹の枝と果実を繋ぐ「果梗(かこう) / 果柄 (かへい)」が ahamkara であり、果梗 / 果柄を通して枝 = 樹本体から果実に入る意識 (Cit の一部) が atman であり、果実の中心から果実を照らす。

(図7 参照)

地球マユは「光の海=Cit」であり、その「海」の表面のさざ波が一人一人の「ジブン=cit=ahamkara (atman) →buddhi→manas」になる。

(図4,5 参照)

自我 x 意識 = 自意識 (自我としての活動)

瞑想 (めいそう) について

止観 目を開いていて見ない 外に向かうのを止める

「考えの場」である脳を通さずに「みる」=観=禪

buddhi で観る = 樹木の見方

外から内へ = 成熟 成長は外へ向かう。成熟は内へ向かう

内面の探求 「客観的」に評価する 自意識の減少

デカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」の「われ」は manas ではなく、buddhi であったはず  
(図7 参照)

(尾田加筆) デカルトの「われ」は明らかに主観であり、主客を区別している。従って、atman ではない。一方、西田幾多郎の純粋経験は主客の区別がなされる前の段階であり、buddhi よりも奥 = atman, cit? 純粋経験を唯一の实在と考える見地から、「善の研究」において西田幾多郎は個人個人の意識は分かれておらず一つであると述べており、正木さんの哲学が考える意識と同じ構図である。

manas が見るのが視であり、buddhi が見るのが観

仏教はこの世の問題 (= 社会問題、自我の問題) を解決するための方法論、考え方、哲学

(尾田加筆) A 級ブッダは世界の真理を追究する。世界の真理はこの世の問題を解決するには役に立たない。解脱したブッダ (A 級ブッダ) を目指しては、この世の問題の解決に資することができない。この世の問題の解決するには、解脱するもっとも下下の段階にいて、気づきを与え、一段上に上がるノウハウを与えるブッダ (B 級ブッダ) が必要である。ほとんどの宗教者が A 級ブッダを目指して、この世の問題解決に向いていない。そもそも解脱して A 級ブッダになることができる人間は極めて少数であり、宗教が無駄な活動になってしまっている。正木さんは B 級ブッダを目指す、と言う。

今の仏教は「あの世」を加えたために「宗教」化した。

哲学はこの世の問題を解決する。宗教は「あの世」を設定することにより、この世の問題の解決を先送りしている。

宗教 ≠ spirituality

「あの世」 = 彼岸 = 形而上学の世界

この世 = 実践的、buddhi の目覚め、高い知性の実装 = 文明のアップグレード、進化

(図4,5 参照)

(尾田加筆) メールで正木さんは「形而上学の世界は有る」と明言された。つまり、一般に「霊の世界」と呼んでいる世界は存在する。「あの世」である光の海とこの世の境界域をどのようにみて、「あの世」をどのように定義するか、の違いと思われる。

止観 = 止揚 ヘーゲル 今の段に居ることを止めると、一段上がる

文明は物質文明 (衣食住) と精神文明が交互に上昇する尺取虫 何度も「アセンション」

(図10 参照)

ブッダ (仏陀) とサッタ (釈迦)

菩薩はこの世において人々のこの世の問題を解決する = B 級ブッダ!

ヨーガとは

Accommodation to the situation、Adaptation to the situation

ヨーガ=合一 果実のままで、自分が大樹であることを知ること = 「個にして全、全にして個」

個と全の合一=buddhi の開眼

⇔ヴィヨーガ、不合一

自分自身のヨーガ=目覚めて脳が活動する前に、意識を heart に下す。

脳の動きを heart に下す。

内側にひっこめる

正木さんたちがこの世の問題を解決するために行った試み

① 自給自足 40年間

② 木を植える 20年間

③ Spirituality (今回はこれについての教えは無し)

ショウペンハウアー

「私たちに見える世界は滝にかかる虹のようなもの。」

虹=世界の可視光の部分だけ

manas の目は一点しか見ることができない ⇔ buddhi の目は広く一度に見える

果実は樹木の想う様に生きる。

果実は樹木のために生きる。

果実は樹木として生きる。

経済の非暴力化 = manas の価値基準で無節操に暴走している。

成長から成熟へ 価値観の転換 = 文明のアップグレード、土から風に

(図10 参照)

そのためには 存在論、認識論 (のアップグレード) が必要

決定論的見方では経済、社会は暴力化する

観照

buddhi の目を持つと社会が変われる

物質から精神へ、社会の、人生の、生活の価値観を変える

(2023\_11\_24, 25 では以上です)